

自己実現と使命感

社会階層論（親の学歴、職業、所得、教育への関心、文化レベルといった事項は、子供の学習意欲や学力に強い影響を及ぼし、社会階層の再生産を生じさせる）研究の第一人者である荻谷剛彦氏は、今から20年ほど前に、高校の進路指導に関する論考で次のように述べていました。

- 高校の進路指導では、さかんに「自己理解」に基づく、「自分のやりたいこと」「自分に向けた職業=適職」探しが奨励されている。要するに、「自分らしさ」を見つけ、それをもとに自分からすすんで、自分らしさの発揮できる進路を選ぶように育てよう、ということだろう。
- 社会が豊かになったからといって、「自分らしさ」を發揮できる、「自己実現」可能な職業の選択肢が誰の手にも届くようになったわけではない。他方で、社会の豊かさは、当面の間、つらくてきつい仕事を避け、親世代にパラサイトできる余裕を生み出した。それがどれだけ続くのかはわからない。それでも、当分の間は、「自分らしさ」探しをやっているつもりになって生きていく余裕はある。

「どれだけ続くのかはわからない」とされた社会の豊かさは、現在どうなっているでしょう。社会構造の変化や不況、少子高齢化の進行など、複合的な要素があるとは言え、当時200万人とも言われたフリーターを養っていた「豊かさ」は失われつつあるというのが実感でしょう。

当時から高校教育に携わってきた一人として、「自分らしさ」の追求と同時に必要な指導は何だったのか改めて考えてみると、二つのことが挙げられます。

一つには、必要な時期に職業人としてのキャリアを確実に積むことの重要性を認識させることです。どんな職業であれ、一人前と呼べる力量を身に付けるには、時間と経験が必要です。私も、最初の5年、10年は満足のいく授業や、生徒への指導はできませんでした。教員が「自分らしさ」を發揮できる職業かと問われると、今でも迷いはありますが、そのときはつらいと思った仕事でも、やっていくうちに「自分らしさ」を活かしながらやれることがあったのは事実です。仕事に就いてからも「自分らしさ」を見つけていくことは十分可能です。

二つには、働くということは自己実現と同時に、社会の一員として地域や国全体の生活を支えていくことであることを理解させることです。自分の生活の充実のために働くことは当然ですが、その生活も、今の社会インフラがあるからこそ成り立っています。しかし、食糧自給や物流、医療や福祉など、様々な社会インフラが、担い手不足や低所得で持続の危機に立たされています。店頭から品物が消える、必要なときに手に入らない、という事態になっていないのは、担い手の人々の「使命感」によってかろうじて支えられているからです。昨年、日本の食糧自給を特集した番組で、道東で酪農に従事する方は「今、結構困難な状況ですけど、未来につなげていかないといけないという使命感はある」と語っていました。私たちはこうした「使命感」を正当に評価してきたでしょうか。ここ数年、物価上昇が話題になっていますが、誤解を恐れずに言えば、労働に対する正当な対価を支払ってこなかった結果として、物価は低く抑えられ（働く人の報酬も抑えられ）、それに慣れてしまったということだと思います。すぐには解決できないかもしれませんが、地域で働く人々の思いや労働の実際を学ぶことで、誰かの犠牲や使命感に依存した豊かさではない、持続可能な地域づくりを考え、学ぶことの必要性を強く感じています。

さて、今年も卒業生を送り出す時期を迎えました。3年生の皆さんと面談をしていて感心したのは、卒業後の自分の在り方について、皆真剣に考えていた、ということです。卒業後、すぐに地域を担う即戦力となる人材は多くはありません。しかし、進学を目指す生徒からは、必要な知識や技能を身に付けて働くという展望を多く聞きました。本当に頼もしい限りです。

3年生の皆さん、卒業おめでとう。次代を拓くあなたたちの未来に幸あれと心から願っています。今日まで生徒の成長を見守ってくださって保護者の皆様、心からお祝い申し上げます。そして、本校を支えてくださっている地域の皆様方、今後も変わらぬご支援をよろしく願います。